

3 松尾頭5・6区の発掘調査概要報告

—妻木晩田遺跡第19次発掘調査（重点調査）—

はじめに

松尾頭地区5、6区の発掘調査（妻木晩田遺跡第19次発掘調査）は、重点調査長期計画第Ⅰ期、短期計画第3期に相当し、松尾頭地区で行う2年目の重点調査となる。

松尾頭地区は、平成7（1995）年度の第1次発掘調査において、大型の庇付掘立柱建物、玉作関連遺構、破鏡、絵画土器など特殊な遺構、遺物が検出されたことなどから、階層的に上位の集団が居住した区域と想定されている。松尾頭地区における重点調査の目的は、この「首長層居住域」と目されるエリアの集落構造を明らかにすることである。

1 第19次発掘調査の概要（第2図）

第19次発掘調査の調査地は、松尾頭4区（平成17年度、第16次発掘調査）の北側に隣接する丘陵頂部平坦面および南側に隣接する北向斜面地であり、前者を松尾頭5区、後者を同6区と呼称する。調査面積は5区613㎡、6区875㎡、合計1,488㎡である。

松尾頭5区は、松尾池に半島状に突き出た北東—南西方向にのびる丘陵の西端に位置する。標高は約107mであり、この丘陵の最高所にあたる。北側と西側は谷に面しており、谷を隔てた北側には松尾頭1区が位置する。東側は3区に隣接し、緩やかに下る斜面となる。この緩斜面では、後期後葉の大型竪穴住居跡が集中して分布している。南側は4区に相当する斜面および鞍部となる。

松尾頭6区は標高約105m～109mで、南側が高く、北側と西側に向けて低くなる斜面地である。東側は3区に隣接している。地形は6区と同様の北向き斜面であり、分布密度は疎ながら竪穴住居跡が確認されている。南側は未調査地であるが6区と同様の斜面が続き、標高約114mの最高所へ至る。6区の南西側には、旧小真石清水地区が位置する丘陵がのびる。現在は広域農道で分断されているが、本来は6区と同一の丘陵である。

表土以下、弥生時代の遺構検出面までの基本層序は、上層から順に暗褐色土層（Ⅰ層）、黒褐色土層（Ⅱ層）であり、Ⅱ層下が弥生時代の遺構面であるが、6区の一部にはⅡ層下にぶい黄褐色土層（Ⅲ層）が堆積する。Ⅰ、Ⅱ層は弥生土器の他に7世紀代～奈良時代の須恵器をわずかに含むが、Ⅲ層は須恵器を含まない。これらⅠ～Ⅲ層の堆積は4区とも共通する。また、4区ではⅡ

層上面において自然流路と考えられる溝状遺構を検出したが、今回の調査ではⅡ層上面での遺構はなかった。

調査区には10m×10mのグリッドを設定し、グリッドに沿って土層観察用のベルトを残したうえで、Ⅰ層～Ⅲ層までを人力で掘り下げた。弥生時代の遺構として、5区で竪穴住居跡2軒、土坑20基、6区で竪穴住居跡2軒、段状遺構1基のほか、溝状遺構やピットを確認した（第3図）。以下、遺構ごとに概要を報告する。

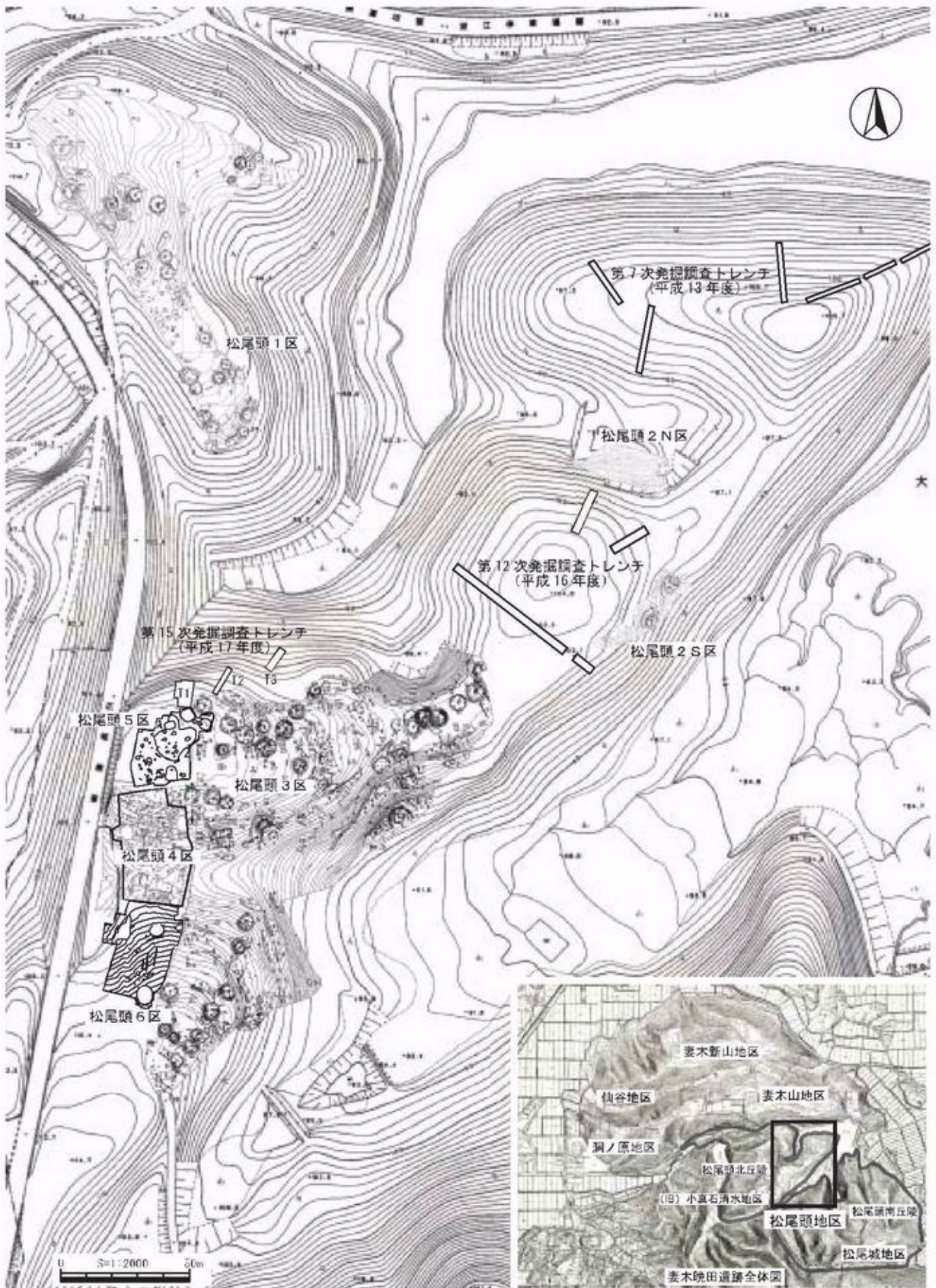
2 竪穴住居跡の調査

第98竪穴住居跡（第4図、巻頭図版1—1）

5区の北端、標高107.3mの丘陵肩部に位置する。すぐ北東側には、第1次発掘調査で検出された第33竪穴住居跡（弥生時代終末期、Ⅵ—1）が隣接する。住居構造を明らかにするため、十字に設定した土層観察用ベルトを残して面的な掘り下げを行った。

検出面での平面形は隅丸の方形を呈し、長軸5m、短軸4.5m、検出面から床面までの深さは、遺存状況の最もよい南壁で約60cmである。4本の支柱による方形の配置をとると考えられるが、東側の支柱穴は2基が重複している。床面ほぼ中央に径約40cm、深さ約30cmの中央ピットがある。床面には周壁溝が全周する。中央ピットを中心とした径約2mの範囲で、床面直上に薄く炭化物が堆積していた。この炭化物層は、床面東側では部分的に間層を挟んで2層確認した。炭層下の床面には被熱が認められず、他所で生成した炭化物が意図的に持ち込まれて床面に敷かれた可能性が考えられる。そこで、炭層の構造や堆積状況を細かく観察し、この炭層の性格について検討する材料とするため、土壌微細形態学的分析用の断面サンプルを採取した。分析結果は平成19年度刊行の報告書において報告する予定である。

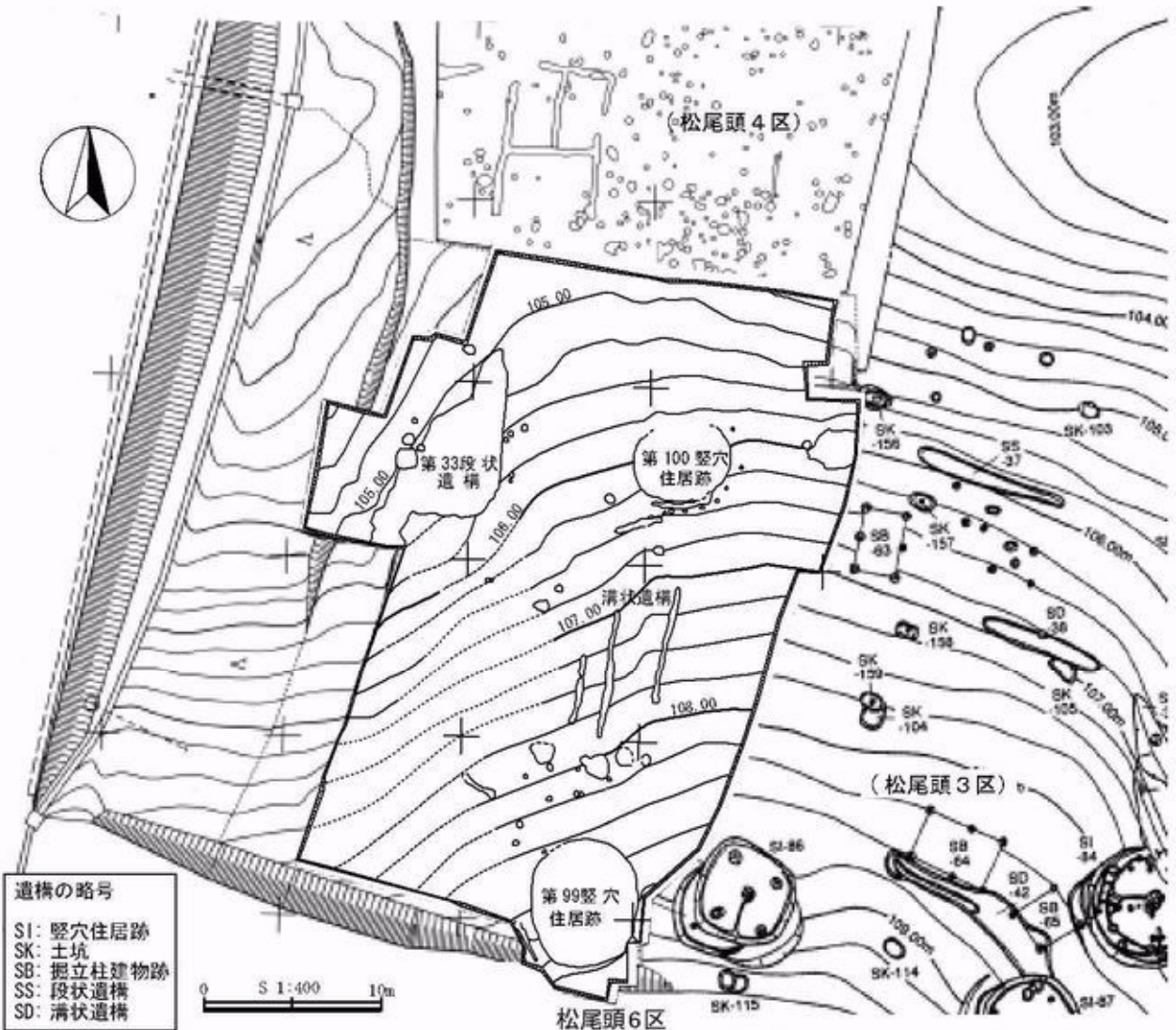
住居の埋土は地山土に類似した灰黄褐色土、黄褐色土を主体とし、複雑な堆積状況である。埋土中から土器が出土したが小片が多く点数も少ない。床面直上からも時期を判断できる土器は出土していないが、床面からやや浮いて出土した土器の特徴、および住居の平面形から、本住居跡の廃絶時期は弥生時代後期後葉（Ⅴ—3）と考えられる。



第2図 松尾頭地区調査区位置図



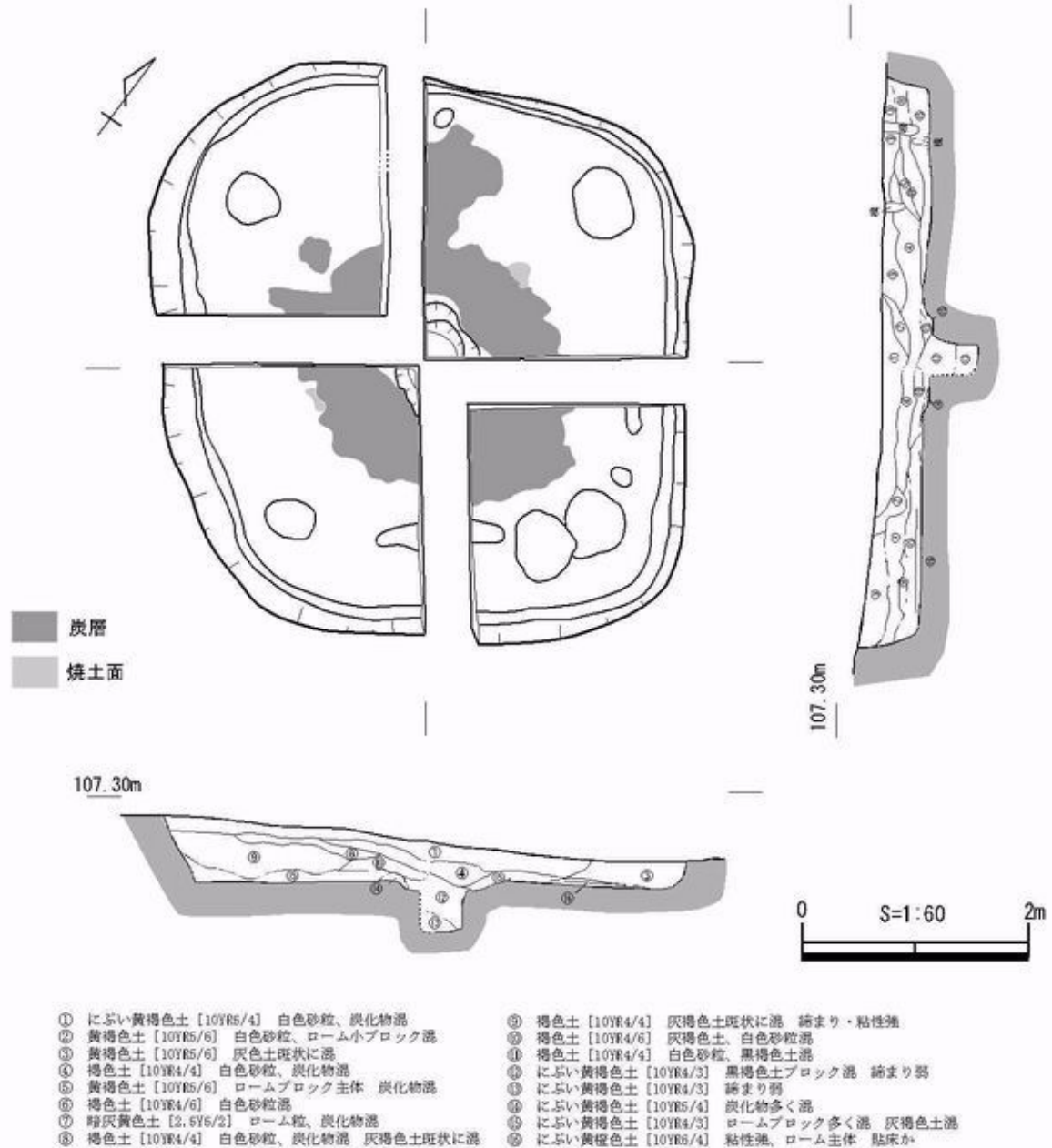
松尾頭5区



- 遺構の略号
- SI: 竪穴住居跡
 - SK: 土坑
 - SB: 掘立柱建物跡
 - SS: 段状遺構
 - SD: 溝状遺構

松尾頭6区

第3図 松尾頭5・6区調査区全体図



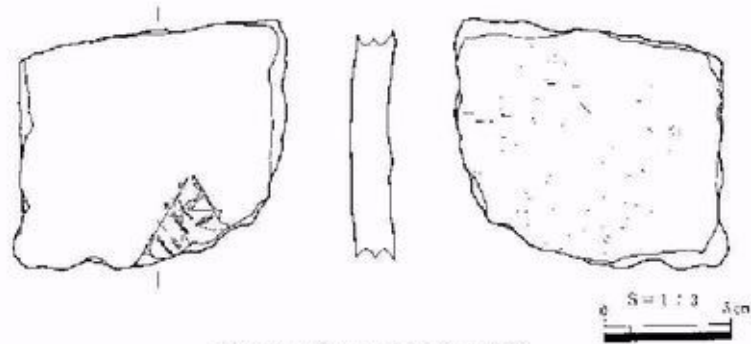
第4図 松尾頭5区 第98竪穴住居跡

第99竪穴住居跡 (写真2)

6区の南東端、標高約109mの緩斜面に位置する。すぐ東側には、第1次発掘調査で検出された第85・86竪穴住居跡(弥生時代終末期、VI-1)が隣接する。斜面下方にあたる北側では壁が遺存していない。検出面での平面形は長軸7m、短軸6.2mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは、遺存状況の最も良い南壁で約80cmである。床面中央付近に長軸90cm、深さ約50cmの中央ピットがあり、その周囲に大小4箇所の焼土面がある。トレンチ調査にとどめたため柱の配置は不明である。床面には周壁溝が二重に巡り、住居の建て替えが行われたことを示唆する。土層断面を観察すると、内側の周壁溝に対応して立ち上がりが見られることから、拡張では

なく縮小された住居である可能性が高い。内側の周壁溝に囲まれた範囲は径約5mの円形となる。内側と外側とで床面に段差はみられず水平である。

外側の住居の埋土は壁際で確認できるのみであるが、ローム質の締まった土であり、「縮小」住居の壁を構築するために意図的に盛られた可能性も考えられる。内側の住居の埋土は暗褐色土を主体とし、レンズ状の自然な堆積状況を示す。埋土中からは土器が出土したが小片が多く、床面直上からも時期を判断できる土器は出土していないが、埋土中から出土した土器の特徴から、本住居の廃絶時期は弥生時代後期中葉～後葉(V-2~3)と考えられる。



第5図 第179土坑出土土器

第100竪穴住居跡（写真3）

6区中央やや北寄り、標高約106mの緩斜面に位置する、弥生時代中期後葉の住居跡である。斜面下方にあたる北側では壁が遺存していない。検出面での平面形は長軸5.5m、短軸4mの楕円形を呈する。検出面から床面までの深さは、遺存状況の最も良い南壁で約25cmである。床面の中央やや北寄りに長軸80cm、深さ約15cmの中央ピットがあり、その周囲に3箇所の焼土面がある。トレンチ調査にとどめたため柱の配置は不明である。周壁溝は東壁、南壁際のみで検出し、西壁際では確認できなかったことから、全周せず部分的に設けられた可能性がある。

埋土の上面から多量の土器片が投棄された状態で出土した（写真4）。床面直上からは時期を判断できる土器は出土していないが、中央ピットの埋土中から口縁部を含む破片が出土している。埋土上面出土と中央ピット内出土の土器に大きな時期差はなく、廃絶時期はIV-2～3と考えられる。

第101竪穴住居跡（写真5）

5区の北東端、標高約107mの丘陵肩部に位置する。すぐ東に第1次発掘調査で検出された第34竪穴住居跡（弥生時代後期後葉、V-3）、北に第33竪穴住居跡、北西に第98竪穴住居跡が隣接する。検出面での平面形はややいびつな円形を呈し、長軸4.5m、短軸4.2mである。検出面から床面までの深さは最大で約25cmであり、周囲の住居跡と比較すると浅い。トレンチ調査にとどめたため柱の配置は不明である。床面中央付近に薄い炭化物層が広がり、その周囲にピットが2基、焼土面が1箇所ある。床面には周壁溝が全周する。遺物は、埋土中から土器片数点が出土した。床面直上からは時期を判断できる土器が出土していないが、埋土中出土土器の特徴から、本住居跡の廃絶時期は弥生時代後期中葉～後葉（V-2～3）と考えられる。

また、住居の西側において長さ3.1m、幅90cm、深さ約20cmの溝状遺構と重複している。切り合い関係から溝の方が新しいが、時期を判断できる遺物は出土していない。直線的な形状から人為的に掘られた可能性が高いと考えられるが性格は不明である。

3 土坑の調査

5区の平坦面において土坑20基を確認した（第161～180土坑）。これらはその規模や形態から複数の性格が想定される。

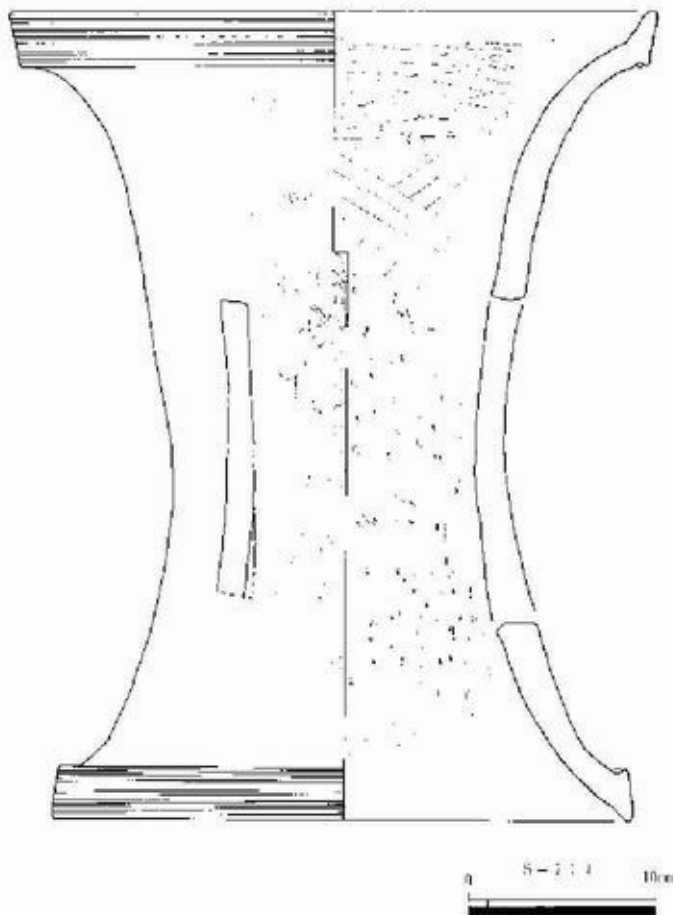
第161土坑（写真6）

5区東側の調査区際に位置する、弥生時代中期後葉（IV-1）の土坑である。平面形は長軸2m、短軸1m、北東-南西方向に主軸をとる長方形であるが、北東側の辺は弧状を呈する。検出面から底面までの深さは約10cmであり、底面は平坦である。埋土上面および埋土中から多量の土器片が出土したが、完形に復元し得る個体はない。その形態から墓壇の可能性も想起されるが、棺痕跡は確認されていない。

第162土坑（写真8）

第165土坑の南西に隣接する弥生時代中期後葉（IV-2）の土坑である。平面形は径1.1mの円形を呈し、検出面から底面までの深さは65cmである。断面は袋状を呈する。底面は径1.3mの円形であり、周囲に幅10cm、深さ3cmの浅い溝がめぐる。埋土中からは壺や甕などの大ぶりの破片が多く出土した。

5区からは、断面が袋状を呈する土坑が他に2基確認された（第175、179土坑）。調査区南東隅近くに位置する第179土坑は中期後葉（IV-1）で、埋土中から線刻のある土器片（第5図）が出土した。北西隅近くに位置する第175土坑は弥生時代終末期後半（VI-2）の土器が出土している。これらの土坑は、その形態から貯蔵穴と推測される。



第6図 第33段状遺構出土器

第165土坑（写真7）

5区の北側、第98竪穴住居跡から約3m離れた南西に位置する、弥生時代後期中葉（V-2）の土坑である。平面形は長軸4m、短軸2.9m、北東-南西方向に主軸をとる隅丸の長方形を呈する。検出面から底面までの深さは約10cmと浅く、壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。西辺および南辺寄りの底面上で3基のピットを検出したが、対応するピットは確認できず、柱の配置を復元するには至らない。底面中央付近によく焼け締まった焼土面があり、その直上の埋土には炭化物が多く含まれていた。このことから、火熱を利用した何らかの作業の場として利用された可能性が考えられる。遺物は、土器片の他にガラス小玉が1点出土した。

その他の土坑

その他、弥生時代終末期の大形の土坑を2基確認した。調査区西壁近くに位置する第177土坑（VI-1）は、長径1.6m、短径1.3m、深さ90cmである。坑底面からは完形の甕形土器が土圧で潰れた状態で出土した（巻頭図版1-2）。第177土坑の5m東に位置する第178土坑（VI-2、写真9）は、長径1.8m、短径1.5m、深さ1mである。

これらの土坑の断面は袋状ではないが、その規模から貯蔵穴として機能した可能性も考えられる。

5区の南辺近くでは、浅い皿状の土坑がまとまって分布している（第167～173土坑）。時期を判断できる遺物がほとんどなく、時期、性格を明確にできないが、そのうちの1基（第170土坑）から緑色凝灰岩製の管玉片が1点出土した。

4 段状遺構の調査

第33段状遺構（写真10）

6区の西端、標高105.5mの緩斜面に位置する。検出面での規模は長さ9m、幅4.5mである。主軸は等高線に対し斜行する。東壁、南壁は良好に遺存し、高さは最大で約50cmあるが、斜面下方にあたる北壁はほとんど流出している。また、西側では先行する溝状遺構と重複している。平坦面上では複数のピットを検出した。これらの中には深さが60cm前後に達し、断面に柱痕跡が認められるものがあり、主軸に平行して一列に並ぶ3本の支柱を抽出できるが柱間隔は一定せず、検討の余地がある。

柱穴の可能性のあるピットのうち、平坦面の中央付近に位置する1基から大型の器台が出土した（第6図）。完存する口縁部を下にして据え置いた状況であり、胴部から脚部の破片が口縁部の周囲に落ち込んだ状態で出土した（巻頭図版1-3、写真11）。脚裾部の一部を欠くものの、ほぼ完形に復元できた。

その他、埋土中から土器片が多数出土した。これらの土器の特徴から、この遺構の廃絶時期は後期中葉～後葉（V-2～3）と考えられる。

5 溝状遺構の調査

6区中央付近の斜面において、等高線に直交する溝状遺構を3条検出した。そのあり方から、昨年度調査で検出された溝や方形区画遺構と関連する遺構の可能性がある。

まとめ

以上、多様な遺構が検出され、松尾頭地区の集落構造を考えるうえで多くの成果を得ることができた。今回の調査成果をまとめると以下のとおりである。

(1) 丘陵頂部の土地利用のあり方

5区北側縁辺で第98、101竪穴住居跡を検出し、妻木

山地区など他の地区と同様に、丘陵頂部の縁辺部に竪穴住居が分布する状況を確認できた。同時に、丘陵肩部における竪穴住居の分布が3区側から連続することが明らかとなった。

丘陵頂部の平坦面では貯蔵穴と考えられる土坑を多く検出した。この平坦面は大型の掘立柱建物や住居が展開する丘陵の最高所であり、松尾頭地区を評価するうえで、この空間がどのように利用されていたのかが重要な手がかりとなる。個々の遺構の詳細な検討、他地区との比較検討を通じて考えていく必要がある。

(2) 第33段状遺構の性格

6区南端で第99竪穴住居跡を検出し、3区からの遺構分布が連続することを確認した。これより下方の斜面部では、遺構密度は低いものの第100竪穴住居跡、第33段状遺構を検出した。第33段状遺構のピットから出土した大型器台は非日常的性格をもつ土器と考えられ、この遺構の性格を考えるうえでの重要な手がかりであるとともに、松尾頭地区の評価にもつながる遺物である。大型器台がこの遺構から出土した意味について、上屋構造の復元も含めて、さらに検討を進める必要がある。

(3) 集落形成期の様相

松尾頭地区は、他の地区に先駆けて弥生時代中期後葉に集落の形成が始まる。今回の調査では、中期後葉（IV-2~3）の竪穴住居（第100竪穴住居跡）および土坑（第161、162、179土坑）を検出し、松尾頭地区が妻木晩田遺跡の集落形成過程を明らかにするうえでも重要な地区であることを再確認した。

妻木晩田遺跡における中期後葉の住居は、これまで松尾頭1区で2軒が検出されているのみであった（第22、24竪穴住居跡）。第100竪穴住居跡の検出により、1区から谷を隔てた南側の丘陵でもほぼ同時期に居住が開始されていたことが明らかとなった。また、5区の東側にあたる3区丘陵縁辺部には中期後葉の土坑（貯蔵穴）が密に分布しており、丘陵頂部にも同時期の遺構が展開していることが確認できた。

「首長層居住域の実態解明」を主な調査課題として松尾頭地区の調査を行ってきたが、昨年度、今年度の調査によって、大型庇付掘立柱建物跡（第41建物跡）の西側にあたる丘陵頂部、斜面部、鞍部の状況をひととおり把握することができた。その結果、第41建物跡は、その周辺に大型竪穴住居など首長層と結びつけ得るような特殊な遺構は伴わないことが明らかとなった。第41建物跡の性格を考えるうえで、消極的ではあるが重要な所見である。

以上のように、松尾頭地区の集落構造を明らかにするうえでの多くの成果を得ることができたが、解決すべき課題はまだ多く残されている。具体的な例をあげれば、大型竪穴住居の集中する居住単位の再評価、もう一棟の大型掘立柱建物（第53建物跡）と居住単位との関係、旧小真石清水地区との一体的な集落構造の把握などである。来年度以降、これらの課題を解決するための調査を進めていくことにしたい。

（君嶋 俊行）

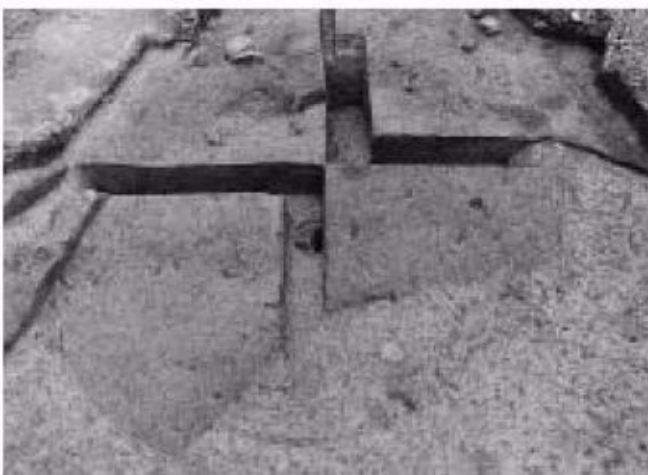


写真2 第99竪穴住居跡（北から）

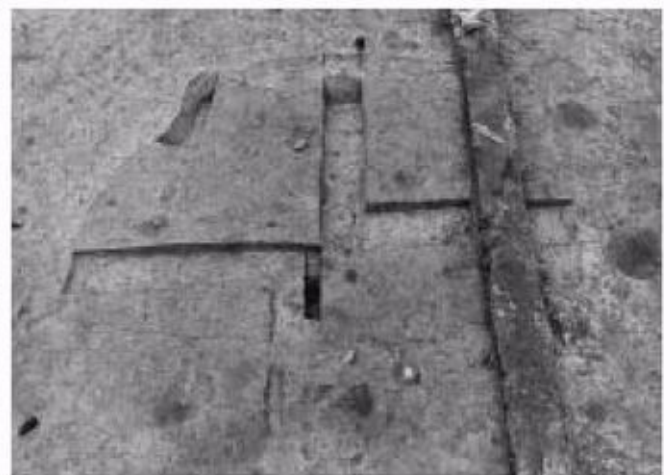


写真3 第100竪穴住居跡（北から）



写真4 第100竪穴住居跡土器出土状況（北東から）

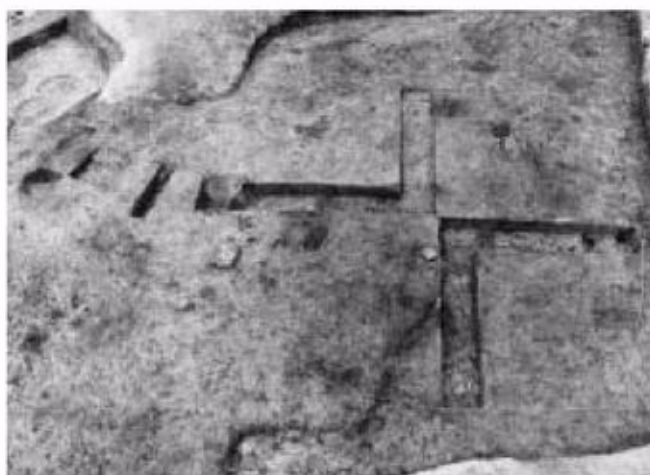


写真5 第101竪穴住居（南から）



写真6 第161土坑（南西から）

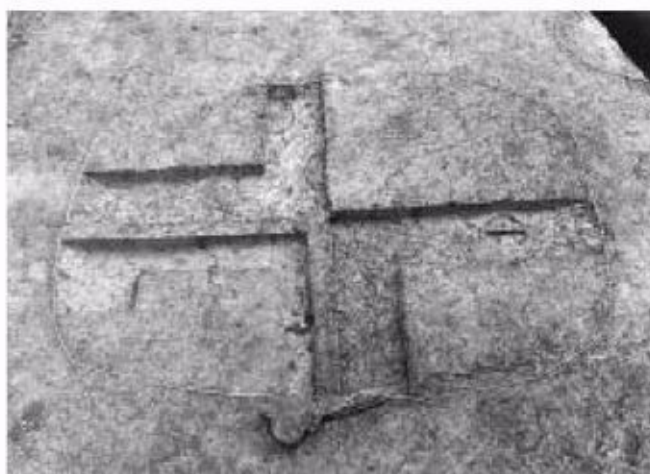


写真7 第165土坑（北から）

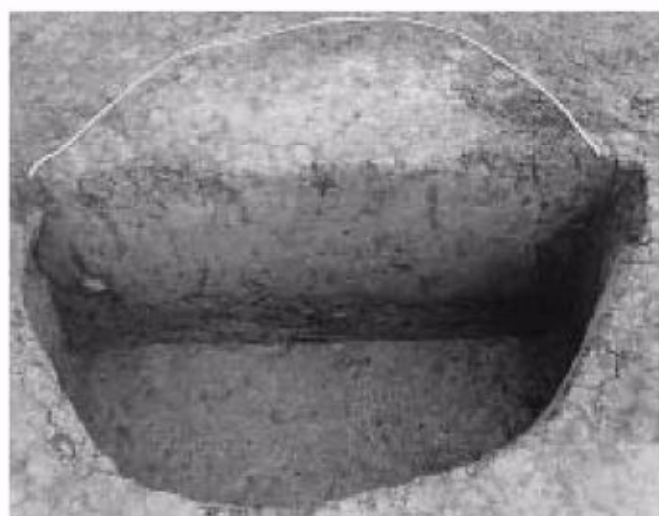


写真8 第162土坑（南から）



写真9 第178土坑（東から）



写真10 第33段状遺構（北から）



写真11 第33段状遺構 器台出土状況（北西から）